

係り結びの法則

係助詞	結びの形	用法	例文	解説
ぞ	れんたいけい 連体形	きょうい 強意	みやこ のほ いっすんぼうし ・都へ ぞ 上りける。(一寸法師) みやこ のほ (都へ上った。)	・「ぞ」は特に訳さないことが多い。
なむ (なん)	れんたいけい 連体形	きょうい 強意	おも め とさ に っき ・いと思ひのほかになむ賞でける。(土佐日記) たいへんが い しやうさん (大変意外なほどに賞賛した。)	・「なむ」は特に訳さないことが多い。
や	れんたいけい 連体形	ぎもん 疑問	き つれづれぐさ ・ほととぎすや聞きたまへる。(徒然草) こえ き (ほととぎすの声はお聞きになったか。)	・係助詞「や」に係助詞「は」が付いた 「やは」は、反語になることが多い。
		はんご 反語	われ ひと いへ お と こんじゃくものがたりしゆう ・我は人の家をやは押し取りてゐたる。(今昔物語集) わたし たにん いえ よこど す (私は他人の家を横取りして住んでいるのだろうか、いやそ うではない。)	
か	れんたいけい 連体形	ぎもん 疑問	ち つれづれぐさ ・いかなるをか智といふべき。(徒然草) ち い (どのようなことを「智」と言うのがよいだろうか。)	・係助詞「か」に係助詞「は」が付いた 「かは」は、反語になることが多い。
		はんご 反語	つかさ なに やまとものがたり ・はかなき官をも何にかはあるべき。(大和物語) たい かんしやく え なん (大したことのない官職を(得て)も(それが)何だろうか、い や何の意味もない。)	
こそ	いぜんけい 已然形	きょうい 強意	ぢごく らん い き いっすんぼうし ・ただ地獄に乱 こそ 出で来たれ。(一寸法師) じごく らん お (きつと地獄に乱が起こったのだ。)	・「こそ」は特に訳さないこともある。
		ぎやくせつ 逆接	あづまびと い たの みやこ ひと こう ・吾妻人 こそ 言ひつることは頼まるれ、都の人は言受 つれづれぐさ けのみよくて実なし。(徒然草) とうごく ひと い しんらい みやこ ひと へんじ (東国の人は言ったことは信頼できるが、都の人は返事ば かりよくて誠意がない。) むかしものがたり き げんじものがたり ・昔物語などに こそ かかることは聞け。(源氏物語) むかし ものがたり (昔の物語などではこのようなことを聞くけれども(まさか ほんとう 本当にこんなことがあるなんて…。))	・「こそ」の結びの後、文が続いていく ときは、逆接になることが多い。 ・「こそ」の結びで文が終わっていても、逆接の意を含むこともある。

※ 上記の係助詞がある場合、文や節の結びが終止形でなく特定の形になることを「係り結び」と言う。

※ 上記の係助詞があっても、結びが省略されることがある。これを「結びの省略」と言う。たとえば、「いづくよりおはしますに**か**、なやましげに見えさせ給ふ」(源氏物語)という文では、「か」の後に付くはずの「あらむ」が省略されている。

※ 上記の係助詞があっても、結びの語の形が、後続の語との関係で変わってしまうことがある。これを「結びの消失」あるいは「結びの消滅」と言う。たとえば、「たとひ耳鼻**こそ**切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ」(徒然草)という文では、「こそ」の結びは「切れ失す」の已然形「切れ失すれ」となるはずであるが、その後「とも」が付いて文が続いていくため、終止形「切れ失す」となり、結びが消失している。

※ 係り結びが最も発達したのは平安時代で、その後は乱れが生じ、法則どおりに係り結びが成立しないケースも多くなった。